# 大学生の自己肯定感及び死生観に影響を与える親子関係

入江和夫・岳田衣実*・古賀淳子**・藤村麻衣***

Child-Parent Relationship which affects University Student's Positive Self-Image and the View of Death and Life

IRIE Kazuo & OKADA Emi & KOGA Junko & FUJIMURA Mai

(Received September 28, 2012)

キーワード：大学生、自己肯定感、死生観、親子関係、しつけ、家庭科教育

## 1．はじめに

2012年、大学生の３人に１人が「自殺を考えたことがある」という実態が私大の大学生を対象にしたアンケート調査によって明らかになっている（東京新聞2012)。藤井（2003）によれば､「大学生は自律を獲得していく中で人間関係の形成能力などに課題を持っているために、人によっては豊かなものにも孤独なものにもなりうる」、「青年期のアイデンティティの形成にとって、死生観は重要な役割を果たす」と述べている。ここで言う死生観とは、「生きることと死ぬことについての考え方」である。海老根（2008）は死生観研究の意義として、「我々が死をどのように捉え、生きることへと繋いでいるのかを理解するため、そして同時に、人々がより良く生きることを導く、質の高い教育や援助を行うために、死生観に関する研究を発展させることは重要である」と述べている。平井他（2000）は「死からの回避」「人生における目的意識」など７因子から成る死生観尺度を開発し、それは看護関係の研究（大山2003）で利用されている。この尺度の特徴は「人生における目的意識」が含まれていることである。大学生活はどのような人間になりたいかを試行錯誤しながら探す時期でもあり、思い通りにならないことで生きる目的を見失う場面も考えられる。このような中で「人生における目的意識」に影響を与える要因を明らかにすることは学生を指導する立場から重要である。

また、自己喪失した大学生に期待することは、新たな目的に向って再びチャレンジすることである。その原動力となるのは自己肯定感ではないかと考えられる。樋口、松浦（2003）は、大学生の自己肯定感は食前に「いただきます」と言う、などの生活習慣と関連があることを報告している。生活習慣は、大学生が生まれ育った家庭生活の中で育まれる。

そこで、本研究は大学生の自己肯定感及び死生観に関して親子関係がどのような影響を与えるのかを明らかにし、その結果について、“家庭生活”を扱う家庭科教育の観点から一考する。

## 2．方法

（１）調査時期　2009年７月

*バッケンモーツアルト（株）　**小城市役所　***防府小学校

（2）対象　男子127名、女子104名（内訳：国立Y大学1年生（医学部、農学部、理学部、工学部、人文学部、経済学部、教育学部）186人（男子110名、女子76名）及び私立G大学2年生（教育学部）45名（男子17名、女子28名））

（3）調査内容

1)「親子関係」：設問「あなたは次のことがどの程度、あてはまりますか」（非常にあてはまる＝4、ややあてはまる＝3、ややあてはまらない＝2、全くあてはまらない＝1）Q121「私は父親を信頼している」Q122「私は父親を信頼している」Q123「私は父親とうまくいっている」Q124「私は父親とうまくいっている」Q125「父親は私の良いところをほめる」Q126「母親は私の良いところをほめる」Q127「父親は私の悪いところをしかる」Q128「母親は私の悪いところをしかる」

2)「自己肯定感（豊田・松本(2004)）」：設問「あなたは以下の項目に、どの程度、思いますか」（とてもそう思う＝4、ややそう思う＝3、あまりそう思わない＝2、全くそう思わない＝1）Q111私は少なくとも人並みに価値のある人間だと思う。Q112私は長所をたくさん持っている。rQ113自分を失敗者だと感じることが多い。Q114私は物事を人並みにできる。rQ115私は誇りに思っていることがあまりない。Q116私は自分を見込みのある人間だと見ている。「Q117 自分にだいたい満足している」「Q118自分をもっと尊敬できたらと思う」「rQ119自分は役立たずな人間だとときどき感じる。「rQ1110自分はだめな人間だと思うことがときどきある。」であり、®項目は逆転して、因子分析を行った。

3)「死生観（平井他（2000））」：発問は「あなたは以下の項目にどの程度あてはまりますか、各項目に該当する番号に○をつけてください」（1全く当てはまらない、2当てはまらない、3やや当てはまらない、4どちらとも言えない、5やや当てはまる、6当てはまる、7非常にあてはまる）Q101未来は明るい。Q103死後の世界はあると思う。Q104人の寿命はあらかじめ「決められている」と思う。Q105どんなことをしても死について考えることを避けたい。Q106私は死についての考えが思い浮かんでくると、いつもそれをはねのけようとする。Q107私は死について考えることを避けている。Q108寿命は最初から決まっていると思う。Q109世の中には「霊」や「たたり」があると思う。Q1010身近な人の死をよく考える。Q1011死ぬことが怖い。Q1012私の人生について考えると、今ここにこうして生きている理由がはっきりとしている。Q1013自分の死について考えることがよくある。Q1014死んでも魂は残ると思う。Q1015「死とは何だろう」とよく考える。Q1016死とは恐ろしいものだと思う。Q1017家族や友人と死についてよく話す。Q1018私は人生にはっきりとした使命と目的を見出している。Q1019人は死後、また生まれ変わると思う。Q1020自分が死ぬことを考えると、不安になる。Q1021私は人生の意義、使命、目的、使命を見出す能力が十分にある。Q1022私は死を非常に恐れている。Q1023人の生死は目に見えない力運命・神など」によって決められている。

（4）統計ソフト：SPSS ver12 及びAMOS19

## 3．結果と考察

（1）親子関係の因子分析

大学生の親子関係に関する8項目について、4件法で調査を行い、主因子法による因子分析を行った結果を表1に示した。

表1　大学生の回転後[1)]の因子行列（主因子法）

| | 因子1円滑な親子関係 | 因子2　適切なしつけ |
|---|---|---|
| Q124私は母親とうまくいっている。 | 0.911 | 0.157 |
| Q122私は母親を信頼している。 | 0.833 | 0.230 |
| Q123私は父親とうまくいっている。 | 0.656 | 0.396 |
| Q121私は父親を信頼している。 | 0.611 | 0.444 |
| Q127父親は私の悪いところをしかる。 | 0.105 | 0.718 |
| Q128母親は私の悪いところをしかる。 | 0.249 | 0.689 |
| Q125父親は私の良いところをほめる。 | 0.322 | 0.668 |
| Q126母親は私の良いところをほめる。 | 0.413 | 0.496 |
| 累積寄与率(%) | 33.5 | 59.9 |
| α[2)] | 0.883 | 0.792 |

1）バリマックス回転
2）クロンバッハのα係数

因子１は父母との「信頼」や「うまくいっている」の項目に集約されることから「円滑な親子関係」とネーミングした。因子２は父母から良いことはほめられ、悪いことはしかられるの項目があることから因子２「適切なしつけ」とネーミングした。これ以降、「親子関係」＝「円滑な親子関係」＆「適切なしつけ」とする。累積寄与率は59.9%でクロンバッハのα係数は因子１が0.833, 因子２が0.792であった。

（２）自己肯定感の因子分析

豊田・松本（2004）による10項目から成る尺度を用いて、主因子法による因子分析を行った。因子負荷量が0.35未満の「Q117 自分にだいたい満足している」「Q118自分をもっと尊敬できたらと思う」項目を省き、再度因子分析した結果を表２に示した。

表2　大学生の回転後[1)]の因子行列（主因子法）

| | 因子1自己有能肯定感 | 因子2自己無能否定感 |
|---|---|---|
| Q111私は少なくとも人並みに価値のある人間だと思う。 | 0.796 | 0.188 |
| Q116私は自分を見込みのある人間だと見ている。 | 0.747 | 0.248 |
| Q112私は長所をたくさん持っている。 | 0.682 | 0.242 |
| Q114私は物事を人並みにできる。 | 0.652 | 0.224 |
| rQ1110自分はだめな人間だと思うことがときどきある。 | 0.217 | 0.850 |
| rQ119自分は役立たずな人間だとときどき感じる。 | 0.243 | 0.775 |
| rQ113自分を失敗者だと感じることが多い。 | 0.161 | 0.579 |
| rQ115私は誇りに思っていることがあまりない。 | 0.372 | 0.491 |
| 累積寄与率(%) | 29.4 | 55.7 |
| α[2)] | 0.840 | 0.803 |

1）バリマックス回転
2）クロンバッハのα係数
3）γ＝逆転項目（４件法の１→４，２→３，３→２，４→１）

２因子構造となった。これは西尾（2001）が中学生を対象に分析した結果と似ていたことから、同じネーミングにした。因子１は「人並みに価値のある人間だと思う」「見込みのある人間だと思う」など自分を肯定的に受け止め、励ますことから「自己有能肯定感」とした。因子２は「だめな人間だと思うことがときどきある」「役立たずな人間だとときどき感じる」な

どの無能さを否定（＝逆転項目として解釈）していることから「自己無能否定感」とした。累積寄与率は55.7%、クロンバッハα係数はそれぞれが0.840, 0.803であった。

（3）死生観の因子分析

平井他（2000）によって7因子から成る死生観尺度が報告されている。この中から「解放としての死」を除き、「死後の世界観」「死への恐怖・不安」「死からの回避」「人生における目的意識」「死への関心」「寿命感」の6因子を構成する23項目全部を用いて、因子分析した結果を表3に示した。

表3　大学生の回転後[1)]の因子行列（主因子法）

| | 因子1死への恐怖・不安感 | 因子2死後の世界観 | 因子3死からの回避 | 因子4人生における目的意識 | 因子5死への関心 | 因子6寿命観 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| Q1016死とは恐ろしいものだと思う。 | 0.852 | 0.073 | 0.167 | 0.081 | 0.066 | 0.058 |
| Q1020自分が死ぬことを考えると、不安になる。 | 0.784 | 0.082 | 0.202 | 0.119 | 0.186 | −0.007 |
| Q1011死ぬことが怖い。 | 0.759 | 0.075 | 0.094 | 0.093 | 0.112 | −0.009 |
| Q1022私は死を非常に恐れている。 | 0.739 | −0.022 | 0.351 | 0.097 | 0.166 | 0.086 |
| Q102死は恐ろしいのであまり考えないようにしている。 | 0.575 | 0.128 | 0.344 | 0.148 | −0.110 | −0.007 |
| Q103死後の世界はあると思う。 | 0.105 | 0.776 | 0.057 | 0.104 | 0.112 | 0.117 |
| Q109世の中には「霊」や「たたり」があると思う。 | 0.011 | 0.747 | 0.052 | 0.094 | 0.052 | 0.176 |
| Q1014死んでも魂は残ると思う。 | −0.028 | 0.739 | 0.086 | 0.232 | 0.237 | 0.121 |
| Q1019人は死後、また生まれ変わると思う。 | 0.156 | 0.536 | 0.003 | 0.117 | 0.257 | 0.075 |
| Q107私は死に付いて考えることを避けている。 | 0.375 | 0.081 | 0.814 | 0.185 | 0.148 | 0.078 |
| Q106私は死についての考えが思い浮かんでくると、いつもそれをはねのけようとする。 | 0.404 | 0.080 | 0.797 | 0.175 | 0.104 | 0.047 |
| Q105どんなことをしても死について考えることを避けたい。 | 0.365 | 0.061 | 0.702 | 0.170 | −0.022 | 0.123 |
| Q1021私は人生の意義、使命、目的、使命を見出す能力が十分にある。 | 0.081 | 0.049 | 0.147 | 0.807 | 0.137 | 0.094 |
| Q1018私は人生にはっきりとした使命と目的を見出している。 | 0.133 | 0.127 | 0.119 | 0.798 | 0.102 | 0.065 |
| Q1012私の人生について考えると、今ここにこうして生きている理由がはっきりとしている。 | 0.192 | 0.131 | 0.131 | 0.645 | 0.183 | −0.021 |
| Q101未来は明るい。 | 0.036 | 0.108 | 0.033 | 0.463 | −0.058 | −0.032 |
| Q1013自分の死について考えることがよくある。 | 0.086 | 0.082 | −0.087 | −0.030 | 0.796 | 0.076 |
| Q1010身近な人の死をよく考える。 | 0.101 | 0.110 | 0.145 | 0.068 | 0.672 | 0.033 |
| Q1015「死とは何だろう」とよく考える。 | 0.126 | 0.269 | −0.064 | 0.082 | 0.670 | 0.026 |
| Q1017家族や友人と死についてよく話す。 | 0.021 | 0.137 | 0.216 | 0.196 | 0.532 | 0.084 |
| Q108寿命は最初から決まっていると思う。 | 0.001 | 0.154 | 0.115 | 0.019 | 0.097 | 0.949 |
| Q104人の寿命はあらかじめ「決められている」と思う。 | 0.014 | 0.222 | 0.031 | 0.049 | 0.058 | 0.846 |
| Q1023人の生死は目に見えない力運命・神など）によって決められている。 | 0.133 | 0.466 | 0.077 | −0.001 | 0.099 | 0.493 |
| 累積寄与率(%) | 14.7 | 25.5 | 35.4 | 45.1 | 54.5 | 63.1 |
| α[2)] | 0.891 | 0.828 | 0.918 | 0.798 | 0.783 | 0.846 |

1) バリマックス回転
2) クロンバッハのα係数

平井他（2000）によれば「Q102死は恐ろしいのであまり考えないようにしている」は「死の回避」に含まれるが、ここでは因子1「死への恐怖・不安」に含まれた。αが高い値だったことから、Q102を因子1の項目として扱った。因子1「死への恐怖・不安」、因子2「死後の世界観」、因子3「死からの回避」、因子4「人生における目的意識」、因子5「死への関心」、因子6「寿命感」と平井らと同一のネーミングにした。累積寄与率は63.1%、クロンバッハのα係数はそれぞれが0.891, 0.828, 0.918, 0.798, 0.783, 0.846であった。

（4）下位尺度得点の性差及び相関関係

1）性差

今まで求めてきた、「親子関係」、「自己肯定感」、「死生観」における下位尺度得点の性差をt検定した結果を表4に示した。

表4　下位尺度得点(平均値)の性差[1)]

| | 男子(n=127) | 女子(n=104) | t値(自由度) |
|---|---|---|---|
| 円滑な親子関係 | 3.40 | 3.53 | 1.54(229)n.s. |
| 適切なしつけ | 3.08 | 3.19 | 1.26(229)n.s. |
| 自己有能肯定感 | 2.67 | 2.53 | 1.72(229)n.s. |
| 自己無能否定感 | 2.41 | 2.35 | 1.08(229)n.s. |
| 死への恐怖・不安 | 4.10 | 4.05 | 0.27(229)n.s. |
| 死後の世界観 | 4.05 | 4.30 | 1.34(228.9)n.s. |
| 死からの回避 | 3.10 | 2.88 | 1.13(229)n.s. |
| 人生における目的意識 | 3.94 | 3.82 | 0.76(228)n.s. |
| 死への関心 | 3.72 | 3.86 | 0.85(228)n.s. |
| 寿命感 | 3.57 | 3.66 | 0.442(228)n.s. |

1)t検定

「円滑な親子関係」の平均は男子3.40、女子3.53、「適切なしつけ」は男子が3.08、女子が3.19であり、いずれも3以上、すなわち「ややあてはまる」～「あてはまる」の範囲であり、性差はなかった。「自己有能肯定感」は男子2.67、女子2.53であり、それは「ややそう思う＝3、あまりそう思わない＝2」の範囲であり、性差はなかった。死生観において、「死への恐怖・不安」は男子4.10、女子4.05であり、「死後の世界観」は男子4.10、女子4.05であり、それらは「4どちらとも言えない～5やや当てはまる」の範囲であり、性差はなかった。「死後からの回避」は男子3.10、女子2.88であり、それらは「2当てはまらない～3やや当てはまらない」の範囲であり、性差はなかった。「人生における目的意識」は男子3.94、女子3.82であり、「死への関心」は男子3.72、女子3.86であり、「寿命観」は男子3.57、女子3.66であり、それらは「3やや当てはまらない～4どちらとも言えない」の範囲であり、いずれも性差はなかった。

2）相関関係

「円滑な親子関係」「適切しつけ」「自己有能肯定感」「自己無能否定感」「死への恐怖・不安」「死後の世界観」「死からの回避」「人生における目的意識」「死への関心」「寿命感」について、相関関係を分析した結果を表5に示した。

表5　男女別大学生の家族関係、自尊心、死生観の相関係数[1)]

| | 円滑な親子関係 | 適切なしつけ | 自己有能肯定感 | 自己無能否定感 | 死への恐怖不安・ | 死後の世界観 | 死からの回避 | 人生における目的意識 | 死への関心 | 寿命感 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 円滑な親子関係 | 1 | .611(**) | .221(*) | 0.052 | 0.105 | 0.161 | 0.118 | 0.122 | 0.168 | 0.003 |
| 適切なしつけ | .523(**) | 1 | .380(**) | 0.079 | 0.088 | .285(**) | .265(**) | .394(**) | 0.17 | 0.017 |
| 自己有能肯定感 | .240(*) | .214(*) | 1 | .280(**) | 0.146 | .230(**) | .209(*) | .548(**) | 0.072 | 0.07 |
| 自己無能否定感 | 0.098 | 0 | .342(**) | 1 | −0.064 | −0.042 | −0.026 | −0.018 | −.276(**) | −0.087 |
| 死への恐怖不安・ | 0.178 | .229(*) | 0.17 | 0.058 | 1 | .193(*) | .557(**) | .312(**) | .326(**) | .176(*) |
| 死後の世界観 | 0.031 | .306(**) | 0.114 | −0.16 | .217(*) | 1 | .349(**) | .411(**) | .450(**) | .459(**) |
| 死からの回避 | 0.071 | 0.139 | 0.135 | 0.024 | .736(**) | 0.028 | 1 | .389(**) | .331(**) | .313(**) |
| 人生における目的意識 | 0.171 | .242(*) | .537(**) | .204(*) | .282(**) | 0.15 | .323(**) | 1 | .319(**) | .256(**) |
| 死への関心 | 0.011 | 0.102 | 0.154 | −.207(*) | 0.133 | .276(**) | 0.085 | 0.154 | 1 | .455(**) |
| 寿命感 | −0.051 | 0.192 | −0.062 | −0.042 | 0.084 | .404(**) | 0.066 | −0.074 | −0.115 | 1 |

1)pearsonの相関係数　*p<0.05, **p<0.01上部＝男子(n=127)、下部＝女子(n=104)

「円滑な親子関係」では、男女とも「適切なしつけ」「自己有能肯定感」の2項目と正の相関があった。

「適切なしつけ」について、上記以外に男子では「自己有能肯定感」「死後の世界観」「死からの回避」「人生における目的意識」と正の相関があり、女子では男子の「死からの回避」が「死

への恐怖・不安」に入れ替わった項目で、正の相関があった。

「自己有能肯定感」について、上記以外に男子では「自己無能否定感」「死後の世界観」「死からの回避」「人生における目的意識」と正の相関があった。女子では、男子の「死後の世界観」「死からの回避」を除いた項目で正の相関があった。

「自己無能否定感」について、上記以外に男子では「死への関心」と負の相関があった。女子では、男子と同様に「死への関心」と負の相関があり、これに加えて「人生における目的意識」とは正の相関があった。

「死への恐怖・不安」について、上記以外に男子では「死後の世界観」「死からの回避」「人生における目的意識」「死への関心」「寿命感」と正の相関があった。女子では、前3者に正の相関があった。

「死後の世界観」について、上記以外に男子では「死からの回避」「人生における目的意識」「死への関心」「寿命感」と正の相関があった。女子では、後2者に正の相関があった。

「死からの回避」について、上記以外に男子では「人生における目的意識」「死への関心」「寿命感」と正の相関があった。女子では、前1者に正の相関があった。

「人生における目的意識」について、上記以外に男子では「死への関心」「寿命感」と正の相関があった。女子では、男子に相当する相関する項目がなかった。

「死への関心」は上記以外に男子では「寿命感」と正の相関があった。女子では、男子に相当する項目とは相関がなかった。「死の関心」との負相関に注目する。男女とも「自己無能否定感」と負の相関がある。

「自己無能否定感」に注目すると、男女とも「自己有能肯定感」と強い正の相関があった。「自己無能否定感」とは“自分はだめなんかじゃない”という意味であり、自己有能肯定感の2重否定である。大学生男女ともに「自己無能否定感」と「死の関心」との間に負の相関があることから、“自分はだめだ”という意識が「死の関心」を高めることに影響している。しかし、男子と違って女子の「自己無能否定感」は「人生における目的意識」と正の相関を示している。換言すれば、男女とも「自己無能否定感」が弱くなったとき「死の関心」が高まるが、それを切り返した時の意識は男子では「死の関心」の低下しかないが、女子はそれとともに、「人生における目的意識」を高める傾向にある。

以上のように、男女の相関に違いがあった。これらの結果を参考にしながら「親子関係」を土台に考え、死生観の「人生における目的意識」をゴールとして、自己肯定感や他の死生観の因子がどのように影響するかについて男女別に共分散構造分析で調べることにした。

（5）「自己肯定感」及び「死生観」に対する「親子関係」の影響

モデル構築の条件として、「死生観」因子の中で男女ともに「寿命感」「死後の世界観」を除いて行った。理由は大学生が目標に挫折しても、何とか立ち上がるプロセスを簡潔に解釈するためである。

「親子関係」を土台に置き、これが「自己肯定感」を経て、「死生観」の「死への恐怖・不安」「死からの回避」「死への関心」が「人生における目的意識」に影響を与えるとしたモデルを構築した。「円滑な親子関係」には「私は父（母）を信頼している」や「私は父（母）とうまくいっている」が含まれている。このような親子関係が築けてこそ、「ほめられる」、「しかられる」といった「適切なしつけ」がなされると考えるのが合理的であり、基盤に男女とも「円滑な親子関係」を置いた。

1）男子

モデルをAMOSによって構築し、妥当性が得られた結果を図１に示した。

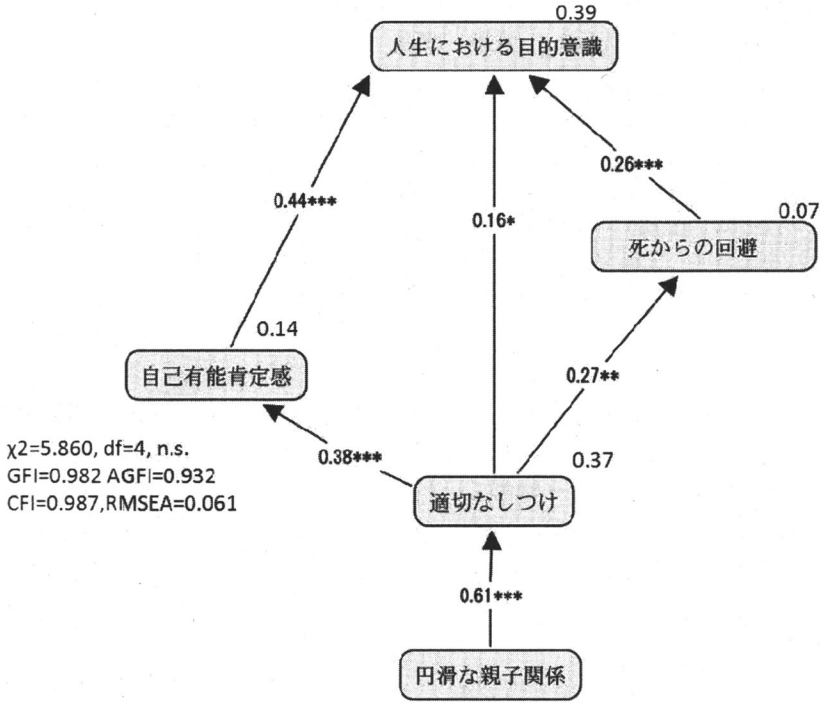


**図１　大学生男子（n＝127）の「人生における目的意識」を高める要因**

「適切なしつけ」がなされる要因として「円滑な親子関係」は有意であった。この両者から「自己肯定感」に→を引くと、「適切なしつけ」→「自己有能肯定感」のみが有意であった。つまり、男子の「自己有能肯定感」をもたらす要因は父母による「適切なしつけ」と言い換えることができる。次に、両者から「人生における目的意識」に→をつなげたところ、有意であった。RMSEAは0.089であり、あまりあてはまりがよいモデルとは言えなかった。「死からの回避」を「適切なしつけ」と「人生における目的意識」の間に介在させると有意であり、このモデルは$\chi^2$値が有意でないこと、GFI,AGFI,CFIが１に近いこと、RMSEA=0.061で0.05に近いことから、当てはまりが良かった。

誰もが最初から生きる目的が明確になっているわけではない。目標を立てては壊れ、また新たな目標を立てるという繰り返しに挫折感を味わうことがあるはずである。その瞬間、死を考えるかもしれないが、とどまり、回避したときに生きる目的意識が高まる。その「死からの回避」を高めるのは「適切なしつけ」であると考える。

図１は標準化直接効果であるが、間接効果も含めた標準化総合効果を表６に示した。

表6　男子の標準化総合、直接、間接効果

| 男子 | 「円滑な親子関係」の総合[1)] | | 「適切なしつけ」の総合[1)] | | 「死からの回避」の総合[1)] | | 「自己有能肯定感」の総合[1)] | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 直接[1)] | 間接[1)] | 直接[1)] | 間接[1)] | 直接[1)] | 間接[1)] | 直接[1)] | 間接[1)] |
| 「適切なしつけ」 | 0.611 | | 0 | | 0 | | 0 | |
| | 0.611 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 「死からの回避」 | 0.162 | | 0.265 | | 0 | | 0 | |
| | 0 | 0.162 | 0.265 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 「自己有能肯定感」 | 0.232 | | 0.380 | | 0 | | 0 | |
| | 0 | 0.232 | 0.380 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 「人生における目的意識」 | 0.244 | | 0.399 | | 0.258 | | 0.438 | |
| | 0 | 0.244 | 0.164 | 0.235 | 0.258 | 0 | 0.438 | 0 |

1）標準化効果

「人生における目的意識」への直接効果は「自己有能肯定感」(0.44)、「死からの回避」(0.26)、「適切なしつけ」(0.16) であり、もっとも大きな影響をもつのが「自己有能肯定感」であった。

「人生における目的意識」への「親子関係」の総合効果に注目する。「適切なしつけ」(0.399) が「自己有能肯定感」(0.44) に次いで高く、それは「自己有能肯定感」を経由するパス及び「死からの回避」を経由するパスの間接効果(0.235)が加わったからである。一方「円滑な親子関係」(0.244) に注目すると直接効果はなく、間接効果のみだったので「適切なしつけ」の約2/3程度であった。

「自己有能肯定感」の総合効果に注目すると、「適切なしつけ」(0.380)「円滑な親子関係」(0.232)であり、前者の影響が大きかった。

「死からの回避」の総合効果に注目すると「適切なしつけ」(0.265)「円滑な親子関係」(0.162)であり、前者の影響が大きかった。

換言すると、「人生における目的意識」を高める要因として「自己有能肯定感」「適切なしつけ」が大きな効果を示した。男子の場合、「適切なしつけ」すなわち、“父母は良いところをほめる”“父母は悪いところをしかる”「しつけ」が「死からの回避」や「自己有能肯定感」を高め、これらが「人生における目的意識」を高めていた。

2）女子

モデルをAMOSによって構築し、妥当性が得られた結果を図2に示した。

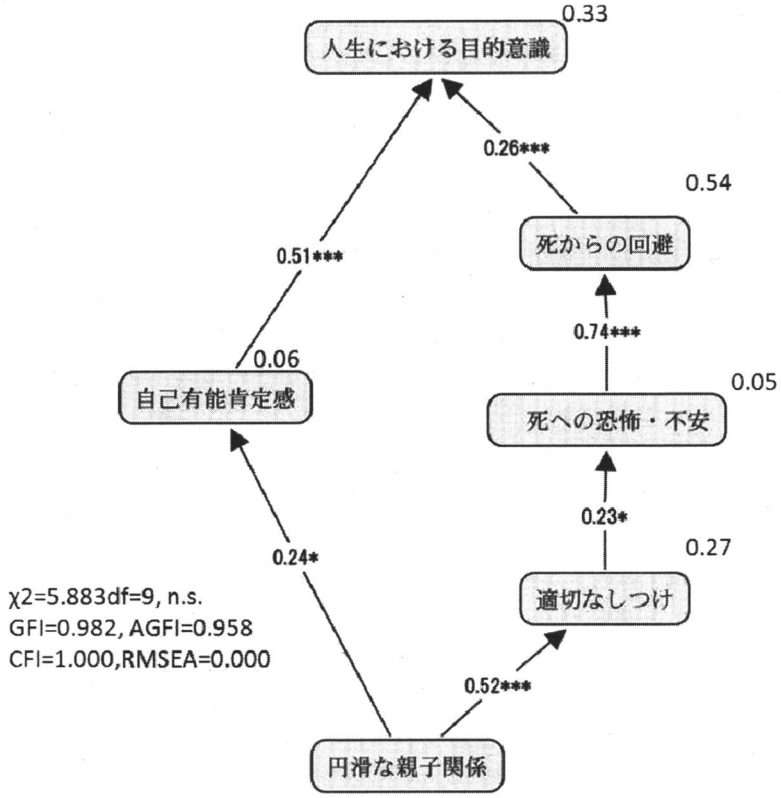


**図2　大学生女子（n＝104）の「人生における目的意識」を高める要因**

「適切なしつけ」がなされる要因として「円滑な親子関係」は有意であった。この両者から自己肯定感に→を引くと、「円滑な親子関係」→「自己有能肯定感」が有意であり、男子の場合とは違った。次にこの３者から「人生における目的意識」に→をつなげたところ、「自己有能肯定感」のみが有意であった。「円滑な親子関係」「適切なしつけ」と「人生における目的意識」の間に「死への恐怖・不安」「死からの回避」をつなげたところ、有意であった。このモデルは$\chi^2$値が有意でないこと、GFI,AGFI,CFIが１に近いこと、RMSEA=0.000であったことから、妥当性があった。

表７に間接効果も含めた標準化総合効果を示した。

表7　女子の標準化総合、直接、間接効果

| 女子 | 「円滑な親子関係」の総合[1)] | | 「適切なしつけ」の総合[1)] | | 「死への恐怖・不安」の総合[1)] | | 「死からの回避」の総合[1)] | | 「自己有能肯定感」の総合[1)] | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 直接[1)] | 間接[1)] | 直接[1)] | 間接[1)] | 直接[1)] | 間接[1)] | 直接[1)] | 間接[1)] | 直接[1)] | 間接[1)] |
| 「適切なしつけ」 | 0.523 | | 0 | | 0 | | 0 | | 0 | |
| | 0.523 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 「死への恐怖・不安」 | 0.120 | | 0.229 | | 0 | | 0 | | 0 | |
| | 0 | 0.120 | 0.229 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 「死からの回避」 | 0.088 | | 0.168 | | 0.736 | | 0 | | 0 | |
| | 0 | 0.088 | 0 | 0.168 | 0.736 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 「自己有能肯定感」 | 0.240 | | 0 | | 0 | | 0 | | 0 | |
| | 0.240 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 人生における目的意識 | 0.145 | | 0.044 | | 0.191 | | 0.259 | | 0.510 | |
| | 0 | 0.145 | 0 | 0.044 | 0 | 0.191 | 0.259 | 0 | 0.510 | 0 |

1）標準化効果

「人生における目的意識」への直接効果は「自己有能肯定感」(0.51)、「死からの回避」(0.26)であり、男子と違って「適切なしつけ」がリンクしていなかった。

総合効果に注目する。「人生における目的意識」への「適切なしつけ」(0.044)は「円滑な親子関係」(0.145)の約1/3であり、男子の場合と逆であった。男子と違って「自己有能肯定感」を高めるのは「円滑な親子関係」(0.240)のみであった。「死からの回避」を高めるのは「死への恐怖・不安」(0.736)、「適切なしつけ」(0.168)、「円滑な親子関係」(0.088)であり、「死への恐怖・不安」を高めるのは「適切なしつけ」(0.229)、「円滑な親子関係」(0.120)で、いずれも「円滑な親子関係」に比べ「適切なしつけ」の効果が大きかった。

換言すると、「人生における目的意識」を高める要因として「自己有能肯定感」が最も大きく、次いで「死からの回避」がその1/2程度の効果を示した。女子の場合、“父母とうまくいっている”“父母を信頼している”といった主に「円滑な親子関係」の方が「適切なしつけ」よりも「人生における目的意識」を高めていた。

## 4．おわりに

大学一年生を対象に「親子関係」が自己肯定感や死生観にどのような影響を与えるのかを分析した結果は次のようにまとめられる。

1) 大学生の親子関係に関する因子分析の結果、「円滑な親子関係」「適切なしつけ」の因子となり、累積寄与率は59.9%でクロンバッハのα係数は0.833, 0.792であった。
2) 「自己肯定感」の尺度を用いて因子分析を行った。1因子構造とはならず、「自己有能肯定感」「自己無能否定感」の2因子となり、累積寄与率は55.7%、それぞれのクロンバッハα係数は0.840, 0.803であった。
3) 死生観の因子分析を行った。因子1「死への恐怖・不安」、因子2「死後の世界観」、因子3「死からの回避」、因子4「人生における目的意識」、因子5「死への関心」、因子6「寿命感」となり、累積寄与率は63.1%、クロンバッハのα係数は0.891, 0.828, 0.798, 0.783, 0.846であった。
4) 1) 2) 3) で得られた下位尺度得点間の平均値に性差はなかった。相関分析の結果、男女とも「自己無能否定感」は「死の関心」と負の相関を示したが、女子では「人生における目的意識」と正の相関を示した。
5) 自己肯定感及び死生観に親子関係がどのような影響を与えるのかについて、共分散構造分析した結果、男子では「自己有能肯定感」「死からの回避」「人生における目的意識」を高める要因に「円滑な親子関係」「適切なしつけ」の両者があるが、「適切なしつけ」の効果が大きかった。一方、女子の「自己有能肯定感」を高めるのは「円滑な親子関係」のみ、「死への恐怖・不安」「死からの回避」「人生における目的意識」では「円滑な親子関係」「適切なしつけ」の両者があるが、前2者では「適切なしつけ」の方が、「人生における目的意識」では「円滑な親子関係」の方に大きな効果があった。

親子関係など家族関係を学習する教科として家庭科がある。今回の学習指導要領改善の基本方針（文部科学省2008）には、「家庭の機能が十分に果たされていないといった状況に対応し、家族と家庭に関する教育を重視する」とあるが、家庭の役割や機能は何をもたらすのかが十分示されていない。今回明らかとなったように、「円滑な親子関係」「適切なしつけ」は「自己有能肯定感」や「死からの回避」などを高めながら「人生における目的意識」の高揚をもたらす。

これは大学生の結果であるが、小中高校生にもあてはまると考えられる。

「適切なしつけ」に注目する。「適切なしつけ」は男女共通して「死からの回避」を高め、「人生における目的意識」高揚に寄与する。しかしながら、家庭科の学習には「しつけ」という視点からの内容はない。それは親の役割だからであろう。中央教育審議会（1998）「第２章もう一度家庭を見直そう」の「ii) 悪いことは悪いとしっかりしつけよう」など、「しつけ」の充実が大切であると述べられている。中学校技術・家庭科「家庭分野」教科書（東京書籍2012）の中には「親子関係をよりよくしていこう」があり、親子関係を理解させるマンガが紹介されている。それは子どもの一人が本を読みながら食事している姿を考えさせる教材である。それを中学生にロールプレイングさせてはどうであろうか。中学生が「しつけ」を親の立場で行えば、その必要感と大切さを理解させることができる。日本の実生活で足りない「しつけ」を子ども側にも理解させる家庭科教育が重要である。これこそ、中央教育審議会（1998）に応え、今回の学習指導要領改善の基本方針「家庭の機能が十分に果たされていないといった状況に対応」に沿うことになる。

「適切なしつけ」は、親子間の信頼や、お互いにうまくやっていこうとする「円滑な親子関係」が基盤にあってこそできることであり、そのことの大切さに気付かせたい。また、「円滑な親子関係」が「適切なしつけ」「自己有能肯定感」「死からの回避」「人生における目的意識」を高めることを視野に入れた授業を展開したい。

大学生を含め、子どもたちは生活の中で躓き、転ぶ。起き上がらなくてはいけないが、それができず、誰にも心を開くことなく、死を選ぶことがある。「死からの回避」は、「円滑な親子関係」「適切なしつけ」の機能をもった家族関係の中で育まれた力によってできる。家庭科は”家庭”科である。この意味を子どもたちが実感できる教科とならなくてはならない。

## 参考文献

東京新聞（2012）：大学生３人に１人「自殺考えたことある」（2012/9/14）

藤井美和（2003）：大学生のもつ「死」のイメージ：テキストマイニングによる分析、関西学院大学社会学部紀要　95巻　145-155

海老根理恵（2008）：死生観に関する研究の概観と展望、東京大学大学院教育学研究科紀要　第48巻　193-202

平井　啓他(2000)：死生観に関する研究．死の臨床　23 (1): 71-76

大山由紀子他(2003)：看護職と看護学生の死生観の傾向に関する比較研究　日本看護学会論文集　34　235－251

豊田加奈子・松本恒之（2004）：大学生の自尊心と関連する諸要因に関する研究 東洋大学人間科学総合研究所紀要　1,　38－54

西尾　隆（2001）：不登校傾向中学生の自尊感情の状況について　不登校問題（中学校）研究員講座　57－62

文部科学省（2008）：中学校学習指導要領解説　技術・家庭編

中央教育審議会（1998）：「新しい時代を拓く心を育てるために」－次世代を育てる心を失う危機－http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/980601.htm

東京書籍（2012）：新しい技術・家庭　家庭分野